

08 年度 東北大学大学院 人間情報科学科における 内地研究員報告

田村 聡子 ※

Report on a Sabbatical Research Term at a Postgraduate Course at Tohoku University Akiko TAMURA

1. はじめに

わたくしは2004年に釧路工業高等専門学校に着任した。奇しくも高専が独立法人化された年であった。以来、本科生は卒業までに英語検定準2級を取得することを目指すこととされ、この目標を達すべく釧路高専生たちの英語の基礎学力の向上に自分の仕事のほとんどの時間を注いで4年間で過ぎてしまっていた。同年に専攻科が設置され、2006年から2年間専攻科の英語も担当することになった。専攻科では英検準2級合格かTOEIC400点獲得が修了要件とされ、この条件をクリアさせるために必死の思いで英語を教えていた。英検合格が英語学習の目標とされるまでは英語の基礎知識も英語に対する学習意欲も決して高いとはいえなかった学生たちを指導することはやりがいがあったものの、それなりの工夫と準備の作業が必要となり、その仕事に大変多くの時間を割かなければならず自分の研究をする時間などあまり残らない状態であった。2005年には担任業務が加わり研究時間を確保することがさらに困難な状況になった。担任をするのも初めてだったので仕事のすべてが‘on-the-job-training’（職場内訓練）のようであった。2008年の3月に担任業務がひと区切りしたときには精神的負担が少し軽くなった。

釧路高専に着任した時点における自分の研究テーマは「開発教育」（国際理解教育）であったが、理系の高等専門学校にこの研究テーマ内容についての研究成果を活用することにはあまり適しておらず実用性も低いことが分かり始めたこ

ろでもあった。

そこで仕事内容がそのまま研究につながるようなことをテーマにすれば授業で実践していることがそのまま研究材料になりデータ収集もしやすくなる。そして何よりも釧路高専生の英語の学力向上に貢献できるのではないかと考えるようになっていた。

以上のような経緯から「英語検定とTOEIC試験を効果的に学習する方法と対策演習問題の作成について」をテーマに東北大学大学院人間情報科学科に所属するテキスト解析学専門の福地肇教授の下で2008年5月から2009年2月までの10ヶ月間内地留学をさせていただくことを申請し、ありがたくも許可されたものである。

2. 大学(院)としての「環境」と「品格」

わたくしの留学先である東北大学大学院情報科学研究科、人間社会情報科学言語テキスト解析論の研究室は東北大学がもつ5つのキャンパス（片平、川内、青葉山、星陵、雨宮）の中の青葉山キャンパスに位置していた。これらのキャンパスひとつひとつがとても広大で徒歩でキャンパス内を移動することは難しい。図書館や学食などへの施設に行くのにもバスかバイクあるいは自転車移動しなければならないほどである。

東北大学大学院といえば2002年にノーベル賞を受賞した田中耕一氏（工学研究科）が卒業した大学として名高いが、田中氏の他にも3名のノーベル賞受賞者を輩出している。このような名門大学院という既成概念を取り除いてもこの大学のキャンパス内に一歩足を踏み入れただけで普段では感じるできないアカデミックな雰囲気

※ 釧路高専 一般教科

気を肌で感じるができる。緑豊かな広大な敷地に数えられないほどの学科と研究施設があり「学びと研究」の環境がこの上なく備わっているように見える。キャンパス内にゴミが捨てられている様を見ることはあまりないし、学生たちの物腰や態度、服装まできちんとしているように見えるのも自分の偏見であろうかと考えてみたが、やはりそうではない。東北大学、大学院生全員がそうであるとはいえないが、少なくとも知識欲の高い学生たちは教員や先輩に対する礼儀やコミュニケーション力が優れていることを強く感じた。それが彼らの物腰や態度に表れ、大学、大学院の雰囲気全般をアカデミックなものにしているのだと感じた。そして、更にそれが大学教育・研究機関としての「品格」形成に影響しているのである。このように整った「環境」に身をおいて学んでいると自然に‘学生’として、そして何よりも‘人’としての「品格」もついてくるものだと感じた。

3. 内地留学の成果

3-1. 言語テキスト解析論研究室

わたくしが籍をおかせていただいていた情報科学研究科の人間社会情報科学言語テキスト解析論研究室では言語教育や言語学習の理論と実践に貢献できる教育・研究をする態勢をとっている。社会人学生に対しては、日常のことばの仕組みや働きに関心があれば専門分野を問わずその門戸を開いている。「言語教育や言語学習の理論と実践」というところでわたくしの研究テーマが適していることからこの研究室で研究させていただくことにした。

3-2. 留学中の成果

最も大きな成果は英検準2級2次面接対策用のマニュアルを完成させたことである。このマニュアル制作は英検準2級の筆記試験合格者に対する面接練習を少しでも手厚く指導してやるためにかねてから取り組みたいと願っていた課題であった。2次面接の解説と受け方、そして7日分の模擬面接を盛り込んだ充実した内容になったと自負している。この内容が大修館書店から評価され、マニュアルの一部が月刊誌「英語教育」2月号の特別記事として掲載されることになった。また、2009年校長裁量経費に採択され釧路高専の学生たちがこのマニュアルを利用できるよ

う冊子化され図書館で貸し出しされることになった。

英検の過去問題のデータから2次面接試験において頻出度の高い動作表現やフレーズ、取り上げられやすい会話のトピックを探り「高専教育」に英語論文として投稿し、採択された。また、筆記問題の過去問題のデータ調査から覚えておくに役に立つ並べ替え問題への4つのアプローチの仕方を「全国英語教育学会」にて発表してきた。

修了要件である英検準2級合格を満たそうと必死な専攻科の学生たちや大学編入希望の学生たちから英語の勉強の仕方についてよく相談を受けていた。彼らには基礎力を固め、さらに文法力を向上させるには英文法解説書を利用して英語を勉強するように指導していた。実際その通り実践した学生は英検にすぐに合格していたし、編入希望生からは自分が英語を理解するスピードが上がってきている手応えを感じるようになったという報告を受けていた。この事実をもとに内地留学期間中に「英文法書利用の奨励」というタイトルで拙論ではあるが執筆し、数研出版の英語教員向け冊子に投稿して採択されるに至った。

釧路高専が取り組まなければならないのは英検だけではなくTOEIC対策へのプレッシャーも高まっていた。そんな中教員自身もTOEICを実際受験し、試験の感触をつかむ必要があると常々感じていたので、留学の時間を利用し受験してみた。結果は自分の目指す点数にはいたらなかったが900点はクリアすることができた。この受験によっていかなる試験であろうとも、英語の確たる基礎知識があればある一定水準の点数の獲得が可能であることが分かり、英語の基礎力の徹底定着を図ることの大切さを再認識できた。

内地留学期間中の研究テーマであったこれらの両試験の「対策演習問題作成」には至らぬまでも、両試験のために効果的に取り組むためには基礎文法を強固にしなければならないことを再認識することができ、これからの研究テーマを「英文法をより効果的に学習するための体系的文法項目の配列の仕方」に軌道修正することができた。今後はこの研究を推し進めていき、学生たちがより理解しやすい英文法の指導方法を確立したいと考える所存である。

最後に、わたくしの内地留学に際しご協力いただいた教職員の方々、特に英語科の皆様には深く感謝するとともに、この場を借りてお礼を申し上げます。